NPO法人
広げよう森の緑！

森を再生する会会報

第17号
平成19年11月20日
20,Nov.2007

特集・開田高原　　ホームページをご覧下さい。 http://www.katch.ne.jp/~kamiyaf18

目　次

秋の植樹祭を終えて
神谷輝幸　1

森を再生すること、生涯をかけて最も価値のある仕事の　一つ　2
坂田　成夫

開田高原「秋の紅葉植樹祭」　3
江坂　慎也

開田高原での植樹祭を終えて
またお目にかかりたい仲間たち　3
大崎　かおり

からまつ　4
草苅　玲子

植樹祭報告　4
キノコ汁と温泉と
野村幸司

祝　杉浦幸雄さん　5
林業写真コンクールで農水大臣賞
斎藤　和彦

足尾に緑を！　5
斉藤　和彦

学校に命の森を　6
杉浦　彦展

熊本名水白川水源地の植林活動に　6
加藤　久巳

山里の写真を撮る　6
杉浦　幸雄

マリヤムの願い　7
汐満　房江

環境キーワード　7
ノーベル平和賞
小谷野錦子

森を再生する会　8

お知らせ

平成19年度　秋の植樹祭を終えて　　神谷輝幸

恒例の秋の植樹祭、今年は場所を変え、１０月１４日（日）に開田高原で行いました。植樹場所は、安城学園高校の宿泊施設「彩雲」周辺です。御嶽山や乗鞍岳を望むこともできますし、近くには御嶽山からの清流が落ちる滝があります。参加者は、御嶽明神温泉の湯で身体を癒し、周辺で採ってきたイヌチダケを具にした味噌汁に舌鼓をうつという楽しみを味わうことができました。

ここは御嶽山のふもと、木曽川の源流域にあり、カラマツの放置林になっています。カラマツは建築材、土木材、パルプなど使い道があります。開田高原にはかつてはこの辺りで使われたと見られる森林鉄道の機関車が別荘と並んで放置してあります。人工的に植えたカラマツは今使われなくなったのです。カラマツを伐採し、日が差すとミズナラ、トチノキ、シラカバなどが芽を出します。宮脇先生の植生調査結果では、この辺りはブナ帯であるようです。そこで、私たちは本来この地に生えていたブナ、ミズナラ、イタヤカエデなど３５０本を植えました。木曽川源流域にふさわしい多様な自然の森の出現を目指しています。

これまでの植樹活動は社団法人国土緑化推進機構「緑の募金公募事業」やイオン環境財団からの助成金を受けて、段戸山において４年間、春と秋の年２回に実施してきました。これまでに植えた木は２５種類５，５００本を越えました。

今年の秋には安城の３ライオンズクラブの寄付で、段戸山「水源の森」に都市と山間地を結ぶ拠点としての方丈庵を完成させ、週末を森の中で自然に親しみながら相互の交流をいっそう深める計画をしています。

クヌギ　草苅　吉秀

多忙な中、参加いただきました皆様に心よりお礼申し上げると共に、これからも皆さんの参加をお待ちしております。それまでお元気でお過ごしください。

開田高原での植樹祭　　森を再生する会　2007年10月14日（撮影　七福酒造　黒柳）

森を再生すること、
生涯をかけて最も価値ある仕事の一つ
安城学園高等学校校長　坂田成夫

今回の植樹祭の目的地は本校の開田高原彩雲ロッジ周辺でした。霊峰御嶽山の中腹１４００Mの場所にある本校ロッジは20年ほど前に建てられ、本校生徒の宿泊・合宿研修地として利用されてきました。周辺は人工林のからまつ林ですが伐採や下草刈りの手入れが不足していて、最近倒木が目立ち、森の荒廃が目立ち、気になっていました。5年前から新入生の研修メニューに下草刈りを入れ、「足助きこり塾代表」稲垣さんと「段戸炭焼き塾」の斉藤さんを講師に迎え、山の手入れに着手しました。5年間で１/１０ほどの森が手入れされ、その部分は今では広葉樹の小さな木が無数に生え、よい森になりつつあります。

9月23日・24日に第1次下草刈り・伐採、そして植樹祭当日の下草刈り、伐採でまた、広葉樹の森が一部分回復しました。今回初めて手入れをした部分の地面や木々が呼吸し始める気配を感じました。初めての体験でした。手入れした部分は10年ほど経過すると広葉樹とからまつ林が混在した素晴らしい森になっていくだろうと思います。

また、今回ブナ・ミズナラ・カエデの苗木を植林しましたがこの木々の成長も楽しみです。春の新緑・秋の紅葉の光景を思い浮かべただけでワクワクしてきます。

いつ開田高原で次回の植樹祭が開催されるかは未定ですが今回手入れをした森が毎年どんな風景に変化していくかは機会をみて報告していきたいと考えています。また、宿泊施設・温泉設備も完備した場所ですのでまた皆さんに利用していただきたいと考えています。

私の心の中では「森を再生すること」、それが生涯をかけて最も価値ある仕事の一つになっています。

（写真　七福酒造　黒柳）

開田高原「秋の紅葉植樹祭」
会計　江坂　慎也

開田高原にある安城学園ロッジ「彩雲」での秋の植樹祭を心待ちにしていた。それは、ブナ、ミズナラ、コウチワカエデ約350本を標高1,360mの開田高原に植樹することの意義を考えると大変魅力のある活動であると思える。人工林としての唐松林に光をさえぎられている箇所もあり、苗木を植樹するのにとてもよい条件の地とは言えないが、その地に潜在していたであろうブナを植栽し、ブナ林を復活させることは、すばらしい試みであると考える。安城学園高校の生徒らも毎年植樹活動をこの地で行っていると聞く、大勢の若者たちが将来の広葉樹林を夢見て植栽する姿が目に浮かぶようである。我々も、今後も地道にこの活動を続けていきたいと思いを強くしたものである。

さて、実は、もう一つ密かに期待していたことがある。それは、御嶽山の麓である開田高原の紅葉である。1週間前の10月6日～7日、南アルプスの甲斐駒ケ岳、仙丈ケ岳山行で、ダケカンバの黄葉やナナカマドの紅葉を期待したのであるが、例年なら一番の紅葉シーズンであるはずが、残念ながら紅葉の時期が今年は遅れており、がっかりして帰ってきた。そして、その日の夜半にはみぞれ混じりの雨が降り、底冷えする夜を過ごした。このことから、今年の紅葉は色づく前に枯れてしまうのではないかと思われるほどであった。これも地球温暖化の影響ではないかと危惧している。夏の猛暑と冬の酷寒の季節だけがますます顕著にあらわれるような気がしてならない。

どこの山にも地球温暖化の影響があらわれてきているようである。我々の植樹したブナの苗木はこの温暖化に耐えてこの開田高原でたくましく成長してくれるだろうか。１０年後、また植樹した場所を見学しに訪れたいと思うこのごろである。

馬の背ヒュッテから見上げた

甲斐駒ケ岳（写真撮影　江坂慎也）

手前のナナカマドはほとんど紅葉していない

そして、案の定開田高原の紅葉も２週間ぐらい遅れているようである。ほとんど色づくこともなくこの時期を迎えているのも珍しいとのことである。御嶽山の初冠雪が10月20日で例年り１３日遅れであると聞いた。

おいもさん　草苅　吉秀

開田高原での植樹祭を終えて

またお目にかかりたい仲間たち
大崎　かおり

参加した方たちが皆さん笑顔で、心に残る植樹祭でした。

いつもは食事準備などで手一杯でしたが、今回は現地のお弁当のお陰で、植樹や草刈ができ、気持ちの良い汗をかくことが出来ました。

安城学園の先生の愛情こもった茸汁、時期の新蕎麦、高原の空気・水、御酒・抹茶など、美味しい植樹際でした。温泉も身体にやさしいお湯で、癒されました。感謝！

坂田先生へ、参加者全員の名前を覚えさせていただいてありがとうございました。(参加した方しかわからない内容で恐縮です)　また皆さんに、植樹祭や作業でお目にかかれれば…と願います。

写真左　黒柳

からまつ

草苅　玲子

植樹祭の人のざわめきを、遠くに聞きながらからまつの林を眺めた。

からまつ林の細い道を、その静謐な美しさに打たれて友と黙して歩いた日を思い出し、北原白秋の「落葉松」を思い出した。

［二］

からまつの林を出でて、からまつの林に入りぬ。

からまつの林に入りて、また細く道はつづけり。

［五］

からまつの林を過ぎて、ゆゑしらず歩みひそめつ。

からまつはさびしかりけり、からまつとささやきにけり。

（全八段中［二］［五］を抜粋）

寺野の大楠　草苅　吉秀

この詩によってカラマツ林の美しさ、儚さが惻々と感じられる。カラマツは、日本に自生している唯一の落葉針葉樹であり、カラマツ林は先駆的な植生のため、立地が安定し土壌が発達すると、遷移が進んで、ほかの群落へと移り変わってゆくという。知れば知るほどカラマツが好きになる。開田高原のカラマツ林は植林なのだろうか。あるいは自生なのだろうか。

植樹祭報告　キノコ汁と温泉と

野村幸示

今年の植樹祭は10月14日(日)長野県の開田高原にある安城学園の研修センター周辺の唐松林で行いました。総勢36名の参加者でコナラ、ブナ、カエデの三種類を350本植えました。去年までの段戸山標高(800m)とは違い、開田高原は標高1,400mもあり苗が寒さで凍りつくかも知れないと云うことで、当初の予定を一週間日程ずらしてしまい、事前連絡をしていた方にはご迷惑をかけてしまいました。当日の参加は、安城から200km、高速を使って3時間半かかり、10時の開会式には早朝から出てこなければならないのですが2名の参加者がありまして、とても感激しました。

標高1,400mの開田高原にある唐松林を切り開き、ということで事前準備は3回程行っております。日帰りでは時間的制約であまり出来ず、9月は一泊で行いました。この植樹祭も13日（土）事前準備、14日(日)植樹祭を行ってきましたが、薄手のジャンパーで充分しのげ、熊笹を伐採、唐松の伐採作業をすればすぐ汗ばむほどでした。キノコも周辺に沢山とれるという事で、キノコ刈りをしたりしてキノコ汁を堪能でき本当にすばらしいところです。夜は御岳山を一望できる野天風呂のある「やまゆり荘の温泉」で入浴後に夕食、軽くビールやお酒を頂き研修センターに帰り、事前に用意しておいたキノコ汁を堪能し、翌日に備え早めに就寝。翌朝は朝6時前から起床し、気の早い人はキノコ刈り、近くの滝を見学、御岳、アルプス連峰の見学と三々五々楽しみました。

6時30分のラジオ体操で身体をほぐした後、身体の準備と苗の準備をしました。植生地は平地で、土地も肥沃なところでしたので作業もやりやすいと思いましたが、熊笹の根がびっしりと張っていて、スコップで四角に切らないと穴を掘ることができませんでした。男衆が穴掘り、女衆が苗植えと云うことになりました。昼食の前後に「やまゆり荘の温泉」の野天風呂で、汗を流し屋外の冷気と温泉の暖かさで最高の気分でリフレッシュできた2日間でした。帰りのバスではエアコンが故障して前半部分がヒーター、後半部分がクーラーというハプニングもありましたが、和気あいあいと楽しく過ごして参りました。

写真左、上　黒柳

おめでとう！杉浦幸雄さん

林業写真コンクールで

農林水産大臣賞に輝く！

ここに紹介する写真は昨秋の植樹祭の場面です。

額田から参加された可愛い娘さんが若いおばあちゃんと植樹している一コマです。

林野庁の外郭団体である日本森林技術協会が公募した第54回・林業写真コンクールで特選（農林水産大臣賞）に輝き、同協会発行の月刊誌『森林技術』9月号の表紙を飾りました。この栄誉を仲間の皆さんにと共に！

斉藤和彦

写真右（撮影：安城市　杉浦幸雄氏）

足尾に緑を！

斎藤和彦

その日、足尾の空は青く晴れ渡り薫風がここちよく頬をなぜながらわたしたちを迎えてくれた。時は五月の連休、前夜高速道をひた走ってきた私は足尾で仲間たちと合流した。

栃木県足尾町、渡良瀬川上流域に位置するこの町は日本の公害の原点といわれる足尾銅山跡として有名である。町を通過した奥まった谷間に異様な風景で黒々とした銅山跡がたたずんでいた。ここでは国有林八千ヘクタール中、約四千ヘクタールが不毛の地と化していた。

その昔、古川鉱山が銅生産のため周辺の樹木をすべて炭に焼き精錬用に使用していたが、国は富国強兵の旗印を掲げてこれを支援し、炭の生産が枯渇すると下流から渡良瀬鉄道を引き込み石炭を運び込んで精錬をつづけた。煙りは谷間に低く垂れ込み雨が降る度に亜硫酸ガスを切り尽した周辺の山々に降り注ぎ渡良瀬川をも汚染した。強酸度と化した土壌は樹木の生育を妨げ、不毛の山から土壌ははげおち岩ばかりがそそり立つ異様な山をつくり上げた。

近年になって多くの人々が立ち上がりこの山の緑化に取り組んでいる。急峻な山に細い道を付け、コンクリートで舗装して土を運び込み客土を行い様々な苗木を植え続けてきた。平均pHが2.1といわれるこの山の土壌は客土した上に苗木を植えても三、四年もするとその根が元の土壌に達しほとんどが枯れてしまった。それでも日本全国からこれを憂えたボランティアたちの参加の波が続いたが、数十年の時間を経ても山は緑を育むことはなかった。数年前のことだったがNHKは足尾に緑が蘇ったと報じた。実情は大半が比較的公害に強いリョウブの木が岩場に張り付いて育ったのだった。

そんな中で炭焼きたちの緑化作戦が始まった。岸本定吉先生や杉浦銀二先生たちが国から５ヘクタールの山のフィルド提供を受けて炭を持ち込み土壌改良に取り組み始めた。私も誘われて参加するようになった。先生たちは客土した土の環の先端を丸く掘っては炭を埋め込む森づくりを指導した。そして仲間たちは毎年これを繰り返した。

何年かして植えた赤松が根付き成長し始め、鹿の食害もあったが驚いたことに真っ黒な糞が各所に見られた。野生の動物たちは本能的にアルカリ質の炭を食べているのだ。この報告が契機となって「足尾に緑を！」と呼びかけた諸団体が今年は炭を持参して集まった。

その日の参加者は約三千名。全国から集まってきた緑の防人たちの行動する様は見事であった。国が右側の尾根筋に向かって狭い階段を取り付けてあったが、所どころその左右のわずかばかりの空き地に植林する場所が設けられていた。そしてそこにはあらかじめ水と苗木と、土と炭とが用意されていた。

延々と天に向かって登って行く防人たちの群れ。私は息子と一時間以上待ってようやく登りの階段に取り付いた。しかしなかなか列は進まず小一時間ほど登った所でわずかな空き地を見つけて6本の苗木を植えることにした。石を除き、穴を掘って炭を入れ土で覆いここに苗木を植えて水を掛けた。

はたして数年後この苗木が何本育ってくれるだろうか。気が付けば遥か眼下に蟻のようにたくさんの人々が張り付いて作業をしていた。

心地よい五月の風とカラフルな衣装に身を包んだ防人たちの行動に感動しながら運動を継続させることの大切さを思った。

学校にいのちの森を

杉浦　彦展

今春、横浜市で開催された市民フォーラム「学校にいのちの森を」（国際生態学センター、毎日新聞社共催）に参加しましたので、その一端を紹介します。

神奈川県秦野市で約40年間、放置状態だった渋沢丘陵の里山（7.7ヘクタール）を、所有者の共有営理組合と里山保全の地元団体が04年5月、渋沢小学校学習林として開放された。この学習林は、クヌギ・コナラ・クスノキ・スギなどの広葉樹、針葉樹の混合林で、オオタカ･ゴゲラなどの野鳥のほかムササビなどの小動物や昆虫が生息している。

落葉を集めた「カブトムシの家」やシイタケの栽培木のほか、木工の作業台や散策路を整備し、学校では理科の観察、総合学習、環境学習に活用している。

渋沢小学校の井上美佐江先生：

「学習林に行って子供たちが真っ先にやることは木登りです。木登りをしたことのない子がほとんどなんです。枝木を集めて秘密基地を作ったり、土の中の生き物について調べたり、木の周りを測って太さを求め、年輪を数えて樹齢を調べたりしています。

どんぐりでおもちゃづくりをしたり、余ったどんぐりが発芽して学習林に植えることになったりしています。6年生が4年生に樹木の苗の世話を託して卒業し、20歳になったらこの林の中で成人のお祝いをしようという子もいて、ぜひ実現したらいいな、と思っています。

子供たちは、学習林ができて藤づるでブランコを作ったりして、自然の中で遊ぶことが好きになりました。むやみに花を摘んだりしなくなり、生き物を捕まえても元に戻すなど自然を大切にするようになりました。

何よりもうれしかったことは、子供同志、仲良しになったことです。学習林では、木を植えるにしても、木を運ぶにしても一人では行動できないし、みんなで協力しないと森では楽しく遊べないことを学んでいます。

虫を誤って死なせてしまい、お墓を作って手を合わせて拝んでいる子もいます。優しい気持ちが育っているのではないかと思っています。」

宮脇昭先生（国際生態学センター研究所長、横浜国大名誉教授）

「バーチャルの世界に生かされている子供たちに、植樹の現場で、成長した森で、樹木や野鳥、虫など生の命の姿を見て、手で触れ、においをかいで、その根強さ、尊さ、はかなさ、素晴らしさを体感させ、一人ひとりの体に刷り込ますための、命の森を作っていただきたい。木を植えることは単に小手先の技術ではありません。心に命の木を植えることです。」

子供たちの未来のために、多様な本物の学校環境保全林を作り育てることの必要性を痛感しています。

熊本名水白川水源地の植林活動に！

理事・地球環境浄化ボランティア

加藤久巳

10月23、24日の二日間、自然回帰水のグリーンプラネットが主催の日本名水百選に入っている熊本の白川水源地(阿蘇内輪山南地)の植林に招待されて行った。

総勢五十人程で四百本の山桜を植林した。女性が多く、北海道から沖縄まで日本中からの参加である。好天にめぐまれ雄大な阿蘇山が良く見え素晴らしい植林活動であった。　一人が六本以上を腐葉土と自然回帰水を使って植えて、日付と植林者の名前が書かれた白い丸い陶板を幹に掛けておくのだ。

自然回帰水を使って焼き上げた陶板は、以前灰色だったそうだが、真っ白に焼き上がり、窯元では不思議がっているそうだ。その訳だが、自然回帰水のように浄化されエネルギーの高く五十年以上昔のような生きた水は、陶土も釉薬にも良い影響を与える結果であろう。私は、名入りの陶板一枚を、そっと鞄に入れ持ち帰って、時々それを眺め楽しんでいる。

山里の写真を撮る　　杉浦幸雄

林業写真コンクールで受賞

三河地方の山里に伝承されている祭り、事などの行事の写真を撮り始めて十五年。

日本は稲作を中心とする農耕生産を基盤としてきました。豊作、凶作の喜び悲しみなど季節の移り変わりごとに歳時儀礼として祭りなどが行なわれてきました。山里では若者が減り経済的に住む人も少なくなり祭事の開催と共に森林の手入れもされなくなりました。

二年ほど前に隣接する町村と合併した豊田市では森林の多さに驚き、「森づくり構想百年計画」を立て森林学校を開くなどして将来のリーダーを育てるなど長期計画が必要です。山里へ行くたび森林、竹林も以前よりも荒れているように見えます。

このごろ森林の荒廃に人々が関心を持つようになりました。それらの活動等を写真に撮り、機会がある毎に伝える事が出来ればと思い、撮り続けたいと思っております。

（紹介記事は5頁に掲載）

秋の植樹祭に参加して

マリヤムの願い　汐満　房江

平成19年度植樹祭は安城学園の開田高原ロッジで行なわれました。私は、前日の10月13日から泊まり、お手伝いをさせて頂きました。午後、少し雨でしたが、男性の方たちで下草を刈って、次の日に大勢で下草刈りもやり、苗木を植えました。

今年は紅葉には未だ早いようでした。緑の葉の多い中で働きながら、昨年の植樹祭を思い出しました。あの時はわが家でお預かりしていたアフガニスタンからの留学生・マリヤム・シャラフォティンと一緒に苗木を植えました。

留学を無事終えてマリヤムは平成19年3月帰国しました。マリヤムの帰国の際に、私は彼女と共にアフガニスタンのカブールに一週間行って来ました。カブール空港の中はあまり整備されていませんでしたし、兵士が銃を構えて立ってもいました。町の中は土埃で街路樹の葉は土にまみれ、枯れたようになっていました。今、マリヤムがアフガンにも早く昔のように「緑の多い美しい村」にしたいといつも言っていた事、また水と電気についても必要だと言っていたことを思い出します。

みんなでアフガニスタンに植樹が出来るようにと思います。

環境を考える　キーワード解説

３．地球温暖化防止

2007年度ノーベル平和賞受賞者はIPCCとアル・ゴア米国前副大統領

2007年のノーベル平和賞は、国連の「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC、パチャウリ議長、事務局ジュネーブ）と前米副大統領のアル・ゴア氏に授与されました。温暖化防止を目指す私たちには大変心強いうれしいニュースです。（地球温暖化は様々な気候変動を起こしています。日本では「地球温暖化」が普及していますが、国連関係では「気候変動」が使われています。）

IPCC

1988年にIPCC（気候変動に関する政府間パネル）がUNEP(国連環境計画)とWMO（世界気象機関）のもとに設立されました。IPCCには、世界中から選ばれた約4000人の優れた科学者や専門家たちが、「気候変動の科学的根拠」、「影響、適応、脆弱性」、「気候変動の緩和」の三つの作業部会に分かれて、科学的な研究資料を収集し、整理し、研究してきました。得られた結論は、1990年IPCC第一次評価報告書となり、2007年11月に第四次報告書が公表されます。これらの報告書は地球温暖化、気候変動についての現在世界中で最も信頼されている情報を提供しています。報告書には、地球温暖化の原因が人為的な二酸化炭素の増加であること、そしてさまざまな気候変動を引き起こし、世界各地で自然環境と社会環境を破壊し、人間社会に深刻な影響を与えている現状を明らかにしました。さらに、将来に予想される気温上昇を、人類に危険のないレベルに抑えるためには、温室効果ガスの排出量を現在の50%以下に減らさなければならないと結論しています。二酸化炭素削減のためには各国は削減努力をすることはもちろん必要ですが、社会の仕組みを、現在のように石炭や石油に依存している社会から、依存しない仕組みに変えなければならないと結論しています。

一方、国連の動きを見ますと、1992年国際連合がブラジル・リオデジャネイロで開催した「地球サミット」では、温暖化防止のための基本的な枠組みを決めた「気候変動枠組条約」が採択され、155カ国が条約に署名しました。国連枠組条約締約国（COP）は会議を重ね、199７年京都で行われた第三回締約国会議（COP3）で、温室効果ガスの削減計画を立てた京都議定書を採択しましたが、2005年になってようやく発効しました。利害が異なり対立しやすい国家間で、温室効果ガスの削減案が成立したのは、IPCCの功績であると思います。

アル・ゴア米前副大統領

ノーベル平和賞委員会は『ゴア氏は世界をリードする環境保護論者で、世界でもっとも気候変動の理解を広めた人物』と評価しました。著書「地球の掟（Earth in the Balance）」（ダイヤモンド社）の中で、ゴア氏は気候変動による環境の変化によって、人間の社会が容易に崩壊してしまうことと、温暖化防止のために政治家が果たすべき役割を熱心に率直に書きました。最近の著書「不都合な真実（An Inconvenient Truth）」は、アカデミー賞を受賞した映画にもなりました。

京都議定書とその後

世界で最初の温室効果ガス削減計画である京都議定書には、アメリカと中国、インドなどの大国が入っていませんが、締約国は削減義務を負うことになりました。

京都議定書の特徴をあげますと、①　締約した先進国に温室効果ガスの削減を義務づけたこと。2008年から2012年までに締約国全体で90年（基準年）の排出量の5%を削減する。②　削減ガスは、二酸化炭素・メタン・一酸化二窒素・フロン等（HFC・PFC・SF_6）。③　削減目標数値は、それぞれの国の状況を配慮して国ごとに異なり、日本･カナダが－６％、アメリカが－７％、スイス・EU（15カ国全体で）－15%。また、ニュージーランドは0%。ロシアは90年以後経済の低迷により、40%減であった。④　温室効果ガス削減のために国際的に協調して先進国全体で排出量削減を目指す。これが「京都メカニズム」と呼ばれる「共同達成」、「共同実施」、「クリーン開発メカニズム」、「排出権取引」等の経済的仕組みです。⑤90年以降の植林・再植林を二酸化炭素の吸収源としてカウントされます。京都メカニズムのうち、クリーン開発メカニズム（CDM）は、先進国と途上国間で、共同でプロジェクトを実施し、そのプロジェクトによって　（8ページ下欄に続く）

みどり、いのち、よろこび。

設立4周年記念誌

特定非営利活動法人森を再生する会

が出版できました。

ご覧下さい

- 内容
- 設立趣旨
- 設立の歩み
- 記念インタービュー：神谷輝幸さん
- 活動報告　2003～2007
- 植生調査、植樹祭、森林観察会
- 会員の声

イエーイ　ログハウスダ！

草苅　吉秀

御問い合わせは：
西尾事務所：　Tel 0563-54-1018　Fax0563-54-1021　（事務局長　榊原和久）、
携帯 090-8556-0503　Eメール：emtown2002@ybb.ne.jp
安城事務所：　Tel 080-3648-4942　Fax0566-99-1393（理事長　神谷輝幸）

ご参加下さい

森を再生する会は、緑のダム作り－流域住民でつくる水源の森－を目指します。
活動は設楽町田峰西川の山林で行っています。

平成19年の活動

- 総会：（会の活動報告と活動計画の討論）平成19年4月
- 春の植樹祭：平成19年5月
- 秋の植樹祭：平成19年10月14日、開田高原でおこなわれました。
- 定例活動日：毎月第4日曜日（会員が現地で針葉樹の間伐、間伐材の処理、広葉樹を植える土地の整備、すでに植えた若木の手入れ、植樹祭の準備、方丈庵の建設）
  方丈庵の建設（今年度からいよいよ始まりました。）
- 研修会、懇親会
- 会報の発行（会員皆様の投稿をお待ちしています）

森を再生する会に入りませんか！

- 会費　年額2,000円、他に山を購入する資金10,000円を広く募集しています。

森の中で働くと、森林再生の技術を学ぶことができますし、元気を取り戻します。

方丈庵の棟上げ　写真神谷

（環境キーワード、7ページの続き）途上国の排出削減に先進国が寄与することができる場合、先進国の削減の一部にカウントすることができる仕組みです。排出権取引は先進国間で、割当量を取引できる仕組みで、英国は2002年に自国内で排出権取引を開始し、欧州連合（EU）は、2005年域内での取引を開始しました。日本には検討中ですが、近く国内の企業間で排出権（排出量）取引が始まりそうな機運です。

京都議定書の締約国でないアメリカ、中国、インド他の首脳が中心となって、別の温暖化防止の動きを始めています。これは「ポスト京都」と呼ばれています。

削減できていない日本の現状

日本は1990年の二酸化炭素排出量は12億6100トン（＝CO2換算）であったので、2008年度～12年度には、この数値から6%少ない11億8600万トンまで減らさなければなりません。しかし、2005年度の排出量は、＋7.8%増の13億600万トン（2007年8月8日発表）、2006年は13億万トン（11月発表）でした。日本政府は産業界に対しては自主的な二酸化炭素削減を求めていましたが、今後は、各産業分野に削減割り当てをする積極姿勢をとり始めました。来年行なわれる洞爺湖サミットでは日本が温暖化防止のリーダーシップを取って欲しいと国内外から、特に国連から期待されています。

参考書：気候ネットワーク編「よくわかる気候温暖化問題」改訂版、中央法規出版会社（2004）

編集から：会報No.17には、ご多忙中、ご寄稿いただき誠に有難うございました。今回は開田高原での植樹祭特集となりました。笹の根を切り取り、耕して苗を植えたご苦労は、美しい景色とキノコ汁と温泉でいやされたようですね。しばらくすれば、美しい紅葉の林の中で、安城学園の若者たちが集うことになるでしょう。うれしい事です。方丈庵の棟上式も終わって、本格的な建設作業です。皆様お疲れ様でした。　小谷野錦子